ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第139回

タージ・マハールへ

実際に現場までいかないと、伝わって来ない感動がある。

いくら映像や通信の技術が発達しても、醸し出される雰囲気や自らと対比した際のスケール感までを画面から感じとることはできない。エジプトのピラミッドやバチカン市国のサン・ピエトロ寺院、カナダのナイアガラ瀑布など、いくつかの場所で、そう感じた。この夏、タージ・マハールを間近に見た際にも、得もいわれぬ荘厳さと、放たれるオーラの強さに圧倒され、しばらくその場に立ち尽くした。

9月初旬、私はデリーの国際空港に降り立った。関空から香港経由で約10時間。インドは思ったより遠かった。すでに夜の9時を回っていたが、ターミナルビルから一歩外へ出ると、むっとする空気が冷房で冷えた体にまとわりつく。すぐに迎えの車に乗り、宿泊先のホテルへと向かった。

死ぬまでに訪ねておきたい場所の一つがタージ・マハールだった。総大理石の白亜の廟（びょう）は、亡き王妃のために王が巨万の富を注いで造ったものだ。世界中の巨大建造物が、神のため、もしくは権力を誇示する目的で建築されてきたなか、タージ・マハールは愛する人のために造られたという点でも興味深かった。

タージ・マハールのあるアグラへは、首都デリーから車で5時間。高層ビルが林立し、どこから湧いてくるのかと驚くほどの数の車と人の波。砂ぼこりの中、色鮮やかなサリーが風をはらんで翻る。

緑と青に映える白い廟。訪れる人のうち9割がインド国内からの旅行者だ。入場料は外国人2000円、インド人は30円。　Agra.Sep.2017

そんな喧騒のデリーを後に、車を走らせるうち、景色は一変していく。

かつて首都であったアグラは、デリーに比べずっとさびれた田舎町の風情を漂わせていた。夕闇の中、町のメインストリートの脇を牛やヤギが闊歩し、野良犬が数匹ずつ連れだって歩いている。道端には所々ゴミが積み上げられ、その前を果物を山積みしたリヤカーが行く。ほとんどの住居はコンクリート造りだが、一目で貧しさが伝わってくる。突然、ブレーキがかかり、はっと前を見ると、道路の真ん中に水牛が立ち止まっていた。ずっと昔、社会科の教科書で見た写真と全く同じ光景だった。

翌朝、7時半に出発した。ホテル内は美しく清潔で、食事も美味しい。しかし、外は別世界だ。今なお続く厳しい階級制度に苦しむ貧しい人々が、鋭い視線をこちらに投げかける。赤ん坊を抱えた物乞いが車の窓を何度も叩く。私は、目を合わせないようにした。

タージ・マハールの周辺は公園になっており、サルやシマリス、野良犬が走り回っている。誰かが餌を与えるのだろう。増えすぎても捕獲されたり、処分されたりすることもないと聞いた。ヒンドゥー教では、動物は神様の乗り物だと教えられており、自然に淘汰されていくのをただ見守っているだけらしい。カーストの身分の低い人よりも動物の方が優遇されているのかもしれない、と思うと複雑な気持ちになった。

セキュリティー・チェックを終えると、宮殿のようなイスラム教の廟タージ・マハールが見えてきた。空の青と芝生の緑に、白く輝く丸い屋根が映える。その美しさに感嘆の声を上げていると、建物の内外に描かれていると思っていた花の絵やコーランの文字が、すべて白大理石を削った型に宝石をはめ込んで造られていると聞き、その贅沢さに二度驚いた。

今も2・5キロメートル離れたアグラ城から廟までの間には、建造物が建てられておらず、王が城内から妃を偲（しの）んだのと同様の景色が見られる。悠久の時を越え、自然と景観を大切にする、この国の奥深さを垣間見た思いだった。

アグラ城から望むタージ・マハール。美しい景観を守るため、周囲には厳しい建築規制が敷かれている。　Agra.Sep.2017